

<学会レポート>

第35回日本生命倫理学会年次大会

丸山 英二（神戸大学）

第35回日本生命倫理学会年次大会は2023年12月9日（土）～10日（日）、『『生き延びる』ための生命倫理学』を大会テーマに掲げ、明治学院大学白金キャンパスにおいて開催された。今大会は基本的に対面での開催とされたが、一部プログラムについては12月15日から1月15日までオンデマンド配信された。

本大会開催に当たっては大会長の柘植あづみ教授（明治学院大学）、実行委員長の加藤秀一教授（同）、副実行委員長の石黒眞里氏（同）をはじめ多数の方々の尽力を得た。

また、大会2日目昼休憩後に総会が対面およびオンラインで開かれた。今回の総会では、定例の決算報告、予算案審議、事業報告、委員会報告がなされた他、学会の法人化および学会事務局業務の委託についての説明、質疑、意見交換に多くの時間があてられた。

以下、筆者が参加することのできたセッションを中心に本大会の内容を紹介する。繁簡よろしきを得ていない点、あらかじめお詫びしておきたい。

1日目午前は、開会式と大会長講演『『生き延びる』ための生命倫理学——生殖技術を題材に』が行われたA会場で引き続いて開かれた大会企画シンポジウム「着床前遺伝学的検査（PGT-M）の倫理について考える」（オーガナイザー：柘植あづみ）に参加した。ここでは、「遺伝性腫瘍領域のPGT-Mに対する社会的課題と医療者における認知」（植木有紗・がん研有明病院）、「遺伝性乳癌卵巣癌当事者の抱える思い」（太宰牧子・クラヴィスアルクス／ゲノム医療当事者団体連合会）、「ありのままを認めない命の選別への反対（ふるい分けられる神経難病当事者としての想い）」（見形信子・神経筋疾患ネットワーク）、「着床前検査（診断）に関する諸外国の法的状況」（本田まり・芝浦工業大学）の報告があり、その後のパネルディスカッションにおいて活発な意見交換がなされた。

昼食・評議員会を挟んで初日午後前半は、公募シンポジウム「安楽死を望む患者にどう対応したらよいか——オランダの研究者との意見交換をもとに考える」（オーガナイザー：児玉聡・京都大学）に参加し、同後半は、公募シンポジウム「倫理委員会委員のインフラ・プラットフォーム」（オーガナイザー：旗手俊彦・札幌医科大学）において、「倫理審査委員会の限界への挑戦——オープンサイエンスによるSDGs達成に向けて」（栗原千絵子・「臨床評価」編集委員）、「審査の質を向上させるために必要なこと——審査委員会事務局の視点より」（寺田浩菜・北海道大学）とともに、「倫理審査の質向上と審査の標準化・均質化の課題」の報告をした。これらの報告の後、フロアから、AIによる倫理審査の可能性を問う質問や、倫理審査委員会の委員交代等の事情から同様の内容の研究計画について異なる審査結果が出る問題への対応など、多様な論点をめぐって意見交換がなされた。

2日目午前は一般演題の会場において、「生殖補助医療で生まれた子の『福祉の格差』とアマ

ルティア・センのケイパビリティ」(西本和見・中京大学)、「Results of Research on the Ethical Acceptability of Artificial Womb Technology in Japanese Students」(シルヴィア・オレーヤージュ・北海道医療大学他)、「産科超音波検査の倫理的課題の検討」(島崎美空・東京大学)、「将来の子の知能を予想する着床前検査の倫理：親と社会の観点」(石井哲也・北海道大学)、「臨床倫理コンサルテーションにおける相談内容の分類と倫理支援の課題——COVID-19に関連する倫理的支援」(三浦由佳里・宮崎大学他)、「アドバンス・ケア・プランニング支援におけるエフェクチュエーションの実践的な活用についての検討」(角田ますみ・杏林大学他)を聴き、若干のコメントを述べた。

昼食後は、総会に参加したあと、公募シンポジウム「病名とスティグマ」の報告と議論を聴いた。

最後に、実り多い大会をご用意下さった柘植大会長をはじめとする大会関係者、スタッフの方々に改めて感謝して本稿を閉じたい。